

ラムレーズンとオレンジエツト

いも

俺はとんでもない嘘をついてしまった。

その場しのぎの保身ではあったが、決して悪気は無かった。俺はその嘘に、今苦しめられている。自業自得とはこのことだろう。

俺がその嘘を吐いたのは、七月二十日。小学生達が、明日から夏休みということではしゃいで下校していたのを覚えている。

小学生達が俺とすれ違っていく。ドラゴンや稲妻がデザインされた、蛍光色のスニーカーが砂埃をたてた。俺は家の郵便受けを見に行く時にしか使っていなかった、どう見てもトイレ用のスリッパを引き摺って歩いていた。中学を卒業して以来、郵便受けを見る以外は一切外に出ず、仕事もせずに十年間引きこもり、とうとう両親に家を追い出された俺は、こんな履き物しか持っていなかった。

憎い。楽しそうに騒いでんじやねーよクソガキが。俺は大人げなく、小学生達を横目で睨んでいた。どうせ誰も俺を見ない。……と、高を括っていた。

一人、俺に気づいた奴がいた。小学生達の列の最後

尾を歩く、チェリーピンクのランドセルを背負った、赤みが勝った髪の子だった。女の子は俺の真横で立ち止まり、俺をじっと見上げた。俺は、目を逸らして立ち去った。

今思えば、何かの予兆だったんだろう。

その数日後、俺は持っていた全財産を使い果たし、いよいよ水一本すら買えなくなっていた。これまでは安いホテルに泊まっていたのだが、当然宿泊費たつて払えない。

夏休みが始まり、相変わらずガキ共は元気だった。遠くから無邪気な笑い声が聞こえる……。歩くのに疲れて、俺はすぐ目の前にあつた小屋みたいなものの縁側に腰掛けた。随分古い建物だ、とぼんやり思った。俺は両親にも中学校の同級生にも会いたくなくて、新幹線を使ってこの田舎まで流れ着いた。だから、ここがどんな地域なのかは一切知らなかった。田舎には、こんな昭和の駄菓子屋みたいな家もまだ残ってるんだな、と感心していた時だった。

「あ。おじさん、またいるね」

背後から幼い声が降ってきた。

「おっ、おじ、おじさん？」

「なんでイヨの家にいるの？」

振り向くと、見覚えのある顔があつた。赤みが勝つ

た髪。あの、チェリーピンクのランドセルを背負った女の子だった。その時は背負っていなかったけど。

「おじさんじゃ……ない、けど」

二十五歳でおじさんと呼ばれたのは、かなりショックだった。全く外に出ず人とほとんど会話もしないと、老けるのが早くなると聞いたことがあったから、女の子の言葉に妙に真実味を感じたのだ。

「おじさんじゃないの？」

「お、おじさんに、見える、の？」

「だって、髪が白っぽいから」

「これ、は、染めてんだよ」

「ふーん。パンダみたいだね」

当時ハマっていたアニメの好きなキャラが、白髪だった。俺は何を血迷ったか、ネット通販で髪染めを買い、自分の髪を白く染めた。案の定似合わなくて後悔したのだが、どうせ両親にしか顔を見せないのだから、と開き直ってそのままにしていたのだ。ろくに鏡を見ていなかったから気づかなかったが、たぶん髪が伸びて白と黒が混ざったような、それこそパンダカラーになっていたんだろう。

「おじさんじゃないんだ。じゃあパンダの人、パンダの人の名前は？」

「……え、名前？なんで……。てか、貴方、君の名前は？」

質問を質問で返した途端、女の子は難しげな顔をした。イヨ、つてのが名前だったのか、と言おうとした。

「不審者？」

「えっ」

が、女の子も質問を質問で返した。

そういえば小学生の頃、「知らない人に名前を聞かれたら不審者だと思いなさい」みたいなこと、よく先生に言われてたっけ。まずい、ここで親でも呼ばれたら、親に「この人、この前通学路でうるうるしてた」とかチクられたら。

「いや全然！不審者じゃない。全然」

「じゃあなんでイヨの家にいるの？泥棒？」

この子は俺を警戒しているわりには、さっきから自分の名前を自分で言ってしまったている。

「あ、いや全然。全然」

「前もいたよね？なんで？」

「え、なんでって……」

「変な人なら、大人に言っちゃうよ」

「人じゃないから！」

咄嗟に出た弁明は、これだった。

「俺、人間に見えるけど、人じゃないから！だから、どこから来たとか、そういうの無いんだよ」

長年人と会話をしないと、こういう滅茶苦茶なことを言ってしまうほどコミュニケーション能力が落ちるの

かもしれない。

「……じゃあ、何？」

まあそうくるよな。

「……………イマジナリーフレンド」

「イマ、リナリーフレンド？」

「君にしか見えない、君の想像上の友達だよ」

俺がなぜこんなコアな言葉を知っているかという
と、これもアニメの影響だった。当時、アニメでもラノ
ベでもゲームでも、とにかくイマジナリーフレンドもの
が流行っていたのだ。

とはいえ、そのジャンルは小学生の間では流行って
いなかったし、仮に流行っていたとしても無理がある嘘
だった。これで納得するわけがないのだから、適当言っ
て立ち去ろうと思っていた。

「イマリナリーフレンド……………。イヨの、友達。そう
なんだ…………。はじめまして！」

が、イヨという女の子は、簡単に俺の嘘を信じてし
まった。小学生というものは、俺が思っていた以上に純
粋だったのだ。

「イヨの名前、伊予。山崎伊予。よろしくね」

「…………。よろ、し、く」

なぜここで退かなかったのだろう。とにかく喉が渴
いていて、腹が減っていたからかもしれない。

「…………ごめん、水もらって、いい？」

「うん、いいよ。待ってる」

伊予は水の入ったコップ一つと、カップアイスを一
つ持ってきてくれた。

「やっぱ、暑い日はアイスだよね」

「…………ありがとう。いいの？貰っちゃって」

「いいんだー、伊予の家アイスいっぱいあるから。

お菓子いっぱい売ってるんだよ」

「ここ、お店なのか…………」

「そうだよ。スルメとか、ふ菓子とかも売ってる」
本当に昭和風の駄菓子屋だったとは。

俺が貰ったアイスは、ラムレーズン味だった。

「その味嫌い？こっちのみかん味と交換する？」

「ううん、大丈夫…………好きだよ」

「パンダの人、名前は？」

「伊予ちゃんが決めていいよ。伊予ちゃんの想像上
の存在だから…………」

「あ、そっかあ。じゃあ…………」

こうして俺は、伊予という女の子のイマジナリーフ
レンド“ラム”として、伊予に菓子を恵んでもらう乞食
となった。

言い訳でしかないが、伊予がくれる食べ物だけで生
きていたのは約三日だ。伊予のご両親は共働きで、家に
帰ってくるのはかなり遅いらしい。ご両親が帰ってくる

まではお祖母さんが面倒を見てくれているのだそうだ。そのお祖母さんも店番をしているため、日中、縁側のある部屋に来ることはない。俺はその昼間を見計らって乞食をしていた。

つまり、伊予からもらうお菓子で三食を賄うことはできない。それに泊まる場所もない。ずっと公園で寝ているわけにもいかず、金を稼ぐ必要があった。

それまで一步も外に出なかつた俺は、コンビニバイトを始めた。本当は人と一切会わない仕事がよかつたが、そういう仕事がこの田舎では見つからなかつた。

バイトを始めた日、もう伊予には会わないと決めた。伊予がこつそりと捨て猫か何かのように無職乞食を餌付けしているなんて、伊予のご両親が知ったら心配どころの問題ではないだろうし、たぶん伊予はお店の商品を俺にくれていた。俺は店の経営とか商品の管理とか、難しいことは分からないけれど……タダで商品を俺に与えるのは、良くないことだろう。何よりも、嘘を吐いて伊予の優しさにつけこむのは、どう考えても道徳的に良くない。これ以上、伊予を利用してはいけない。俺はその日を境に、伊与の家に行かなくなつた。

「ラム！珍しいね、こんなどこにいるなんて」

伊予との再会は、その一週間後だった。バイトが終つてコンビニから帰っている途中、伊予と同じ背丈の

雑草が生え散らかっている道の向こうから、伊予が現れた。馬鹿な俺は思いつかなかつたが、俺が会いに行かなくても、偶然伊予と会う可能性なんていくらでもあつたのだ。

「伊予、どうか、した？」

「え？別になんもないよ。おばあちゃんのお使い終わったから、散歩！」

伊予は当然のように、俺の横を歩き出した。

「来た道に戻ることになつちやうけど、いいの？」
「いいの！久しぶりにラムに会えたんだし、一緒に歩く。最近いなかつたから、消えちやつたのかなつて心配だつたんだよ。……そういえばイマジナリーフレンドつて、私が忘れちやつたらどうなるの？」

これは都合の良い機会だ、と俺は思った。いつかは消える存在”だと認識させておけば、自然とフェードアウトすることができる。これなら、伊予が俺を心配することも、俺の嘘に気づいて傷つくこともない。

「伊予が精神的に大人になつたら……お姉さんになつたら、消えていなくなるよ」

「えっ！」

伊予は慌てて俺のシャツを引っ張つて、俺に実体があることを確かめた。

「イマジナリーフレンドは、小学校低学年までに見えなくなるのがほとんどかな」

「ラムも消えちやうの？いなくなっちゃう？」

「まあ、そうだね」

伊予の顔が、夏の日差しに照らされているのに青白く見えた。

「それって、いつ？いつ消えちやうの……？」

「それは、うくん……俺にも分からないかな……」

今にも泣き出しそうな顔で言われると、俺もいつ消えると明言することはできなかった。気が引けた、というのもある。が、それ以上に、嬉しかった。

こんなに伊予が俺のことを気に入ってくれていたと知って、嬉しかった。

思えば俺は、長らく誰にも“いる”ことを求められていなかった。

中学校ではなぜか友達ができなかった。これは本当になぜか分からない。いじめられていたわけでも、嫌われていたわけでもないと思う。でもなぜか友達はできなかった。タイミングとか運とかが悪かったとしか言えない。挨拶をする程度の面識のある人は何人かいたけど、俺が風邪で休んだ翌日登校しても、休んでいたことにすら気づかれなかった。

両親はというと、これもまた微妙な距離感だった。ニートや引きこもりの体験談によくあるような、母親はご飯を部屋の前に置くだけ、父親とは会話すらない……みたいな状態ではなかった。一応、食卓を三人で囲ん

で食事をとってはいたし、それなりに会話もした。

ただ……気まずさみたいなものが、全く無かったとは言えない。時々、母親は通信制の高校やバイトのチラシをその晩のおかずと一緒に食卓に置いていた。母親は

「こういうの、やってみたら？」と口にこそしなかったが、そのチラシに目を留める俺を、台所から見ている。こういうことが何度かあつてから、俺は毎朝、郵便受けに入った新聞を父親のために取ってくるという口実で高校やバイトのチラシを抜き取って自分の部屋のごみ箱に捨てていた。

父親は、俺のことを母親以上に深刻にとらえていた。夕食を食べ終わって、俺が自分の部屋に引っ込んだ後、

「あいつも今年で二十五だ。俺が結婚した歳になる」、「カウンセリングにでも行ってくれば、何か変わったたりしないだろうか」、「いつまでこの状態が続くんか」と泣き

そうな声で母親に話した。

いてもいなくても同じか、できればいい方がいい……俺はそういう人間だった。

「ラム、明日遊ぼう。明日は伊予の家、来る？」
菓子を貰って食べたらさっさと帰る、ろくすっぽ会

話もできないような俺を、どうしてそんなに。

「あー、あ、ああ。じゃあそうしよう、かな」
こうして俺は、とんでもない嘘を延長した。

そして今も、伊予はこの嘘に気づいていない。イマジナリーフレンドをよく知らないんだろう。想像の産物が菓子を食べるなんておかしいってことに気づかない。いつかは、本当のことを言わなければならぬに……。

「今日、遅いね。来ないのかと思っちゃった」

伊予は縁側にラムネ瓶を二本持って現れ、俺の横にちよこんと座る。

「え、そう？」

「もう四時だよ。遅刻ー」

いつもは午後三時に来ている。今日はいつもとバイトのシフトが違ったから遅くなった。バイトをするイマジナリーフレンドなんておかしいから、バイトのことは伊予に言っていない。俺は伊予に幾重にも嘘を重ねて、このおかしな関係を保っている。もう生活費も安定してきているから、菓子も必要ない。いったい誰の、何のための嘘かも分らない。もはや嘘を隠すための嘘だ。

「そうか、もう四時……すぐ帰らないとだな」

「えーっ？いいよ、ママとパパが帰ってきててもいらないよ」

伊予は赤みが勝った髪を揺らして、俺の腕を引っ張る。ご両親に出くわしたらマズい、最悪警察行きだとは言えない。俺の姿は伊予にしか見えない、という設定なのだから。

「ご両親との時間は大事にしなきゃだよ。俺なんか

と話すより、ご両親といっぱい話しな」

「……はあい」

俺はぎこちなく笑いかけて、ラムネのビー玉を落とす。ブシュッと勢いよく泡が噴き出した。

「おわっ」

「あ、さっき畳に落としちゃったのそっちか」

「先に言ってくれよ！」

泡は弾けながら次第に勢いを弱めて、俺の手の甲をどろどろと伝った。

小学校の夏休み中、俺はほぼ毎日、イマジナリーフレンドを演じて伊予に会っていた。そして今日、小学校の始業式があった。

俺は昨日伊予に言われた通り、午後四時に伊予の家の縁側に来ていた。縁側の傍に五分くらい立っていただろうか……ランドセルの金具の音がして、俺は後ろを振り向いた。

「良かった、ちゃんといる！ただいまラム」

「お、おかえり。久しぶりに友達に会えて、どうだった？」

「んー、フツーカーな」

「はは、そうかい」

まあ小学校低学年なんて、そんなもんか。終わってしまった夏休みにも、始まる新学期にも、大した感慨は

抱かないものだろう。

「ラム、今日アイス食べよう」

「ありがとう。……でも食べ過ぎてお腹壊すなよ」

「あはは！ラム、パパみたいなこと言うじゃん」

……出しゃばり過ぎたかな。家族でもないくせに。最近やたらアイス食べているから、ちよつと心配になったのだ。

「それでねー、加奈先生に『伊予ちゃん日は焼けてないね。先生なんてすぐ黒くなっちゃうから羨ましいな』って言われたよ」

「ほんとだ。俺も白い方だけど、俺より白いな」

「美白！でしょっ」

「またませたこと言って……。あ、やべ。もう日い落ちてる」

夏休みが終わったのだ、日が落ちるのも早くなる。暗くなっても居座るのはさすがに良くないだろう。

「今日は帰るわ。じゃあな、伊予」

「いつもより早くない？……また明日、絶対だよ」

「……うん。また明日」

帰り道、三十代後半くらいのおばさんが二人、向こうから歩いてきた。

結構近くをすれ違ったので、俺は軽く会釈をしよう

として、やめた。あまり目立ちたくない。

俺の背後から遠ざかっていく、おばさんの会話。

「ねえ、あいつじゃないの。ほら、今通った奴」

「あー、学校通信の？そういえば染めた髪にポロい服って書いてあったわ」

……もしかして俺のことだろうか。元々俺は被害妄想をしがちだが、今の会話はタイミングを考えても俺と無関係とは思えない。学校通信って何だっけ。学校で配られる、保護者への連絡が印刷されたプリントのことか。

「でも、たしか三十代でしょ。ちよつと若くなかった？」

「……一応学校に言っておく？」

俺は四畳半のアパートに帰って、カップラーメンにお湯を注ぎながら思考を巡らせた。

あのおばさん二人には、たぶんこの辺の小学校に通う娘、息子がいる。そして夏休みが明けて始業式があった今日、二人の子ども達が、学校通信とかいうお便りを持って帰ってきた。そのお便りに、『不審者の目撃情報が寄せられています。ご注意ください。特徴…髪を染めている、服がポロポロ、推定三十代』みたいなことが書いてあったのだろう。

「……え、俺捕まる……？」

どう考えても俺だ。髪は家を出て以来染め直してい

ないが、時々伊予にからかわれるように、パンダみたい
に白黒ではある。充分『染めている』の範疇だろう。服
は家から持ってきた、中学生の頃から来ている数着を着
まわしている。ボロいと言われても致し方ない。

唯一当てはまらない特徴、『三十代』。しかし、これ
も手放しには安心できない。伊予は初めて俺と話した時、
俺を“おじさん”と呼んだのだ。つまり俺は、傍から見
た人に『三十代』と推定されても何ら不思議はない容姿
だということだ。

「いや、いやいやいや……」

伊予はまだ六、七歳。そりゃ二十五歳もおじさんに見
えるだろう、俺と二十歳近く歳が離れているのだから。
そもそも小学生だぞ、大人の年齢なんて判別できるの
か？二十五歳も三十代も同じに見えているんじゃない
か？

……ちよつと待てよ。

「二十五って、四捨五入したら三十じゃね？」

同じに見えるっていうか、事実、ほぼ同じなのでは。
なるほど、両親も家から追い出すわけだ。

俺はネットの掲示板に、『悲報 俺、近所の不審者と
特徴が完全に一致する』というスレを立てようかと思っ
たが、笑いごとではないからやめた。

伸びきったラーメンを啜りながら俺が出した結論
は、『まだ俺が不審者認定されたとは限らないが、暫くは

バイト以外の目的で外出しない』とりあえず、これだけ
だった。

「ありがたあー」

自動ドアがチャイム音と共に開いて、お客さんが帰
っていく。

九月上旬。バイト先のコンビニとアパートを歩き来
する日々。あの日以来、本当にバイト先以外には行っ
ていない。買い物はネット通販。でも、全然苦痛は無い。
二カ月前まで、十年に渡ってどこにも外出していなかつ
たのだから。

全く変わっていない。……一瞬“変”だったのが、
元に戻っただけ。一瞬“ラム”だったのが、俺に戻った
だけ。

「お疲れ様、悪いねシフト変わってもらっちゃって。
夕方はしんどいでしょ」

背後から店長に声をかけられた。

「あつ、いや全然平気っす。俺、昼も夜もなんもな
いんで」

「そうかい？ありがとね。もう上がんなよ」
俺は挨拶をしてスタッフルームに入った。

鈴虫の鳴き声の中、暗い砂利道を歩く。スマホで時
刻を見ると、午後八時半だった。誰ともすれ違わない。

………伊予は今頃、夕食を食べ終わって、家族とテレビでも見ているだろうか。俺のことをきれいさっぱり忘れていてほしい。ラムなんて、最初から存在しなかったように。……いや、最初から存在しなかった。俺が自分のためだけに吐いた、嘘だったのだから。最初から最後まで、伊予はラムに嘘を吐かれっぱなしだった。俺は最初から最後まで、伊予に嘘を吐きっぱなしだった。

俺はこれほど伊予からの恩を仇で返しておきながら、伊予が俺の嘘に気づかず、傷つかずにいることを願っている。気楽な子どもらしく、完全にラムを忘れているか、「ラムは伊予がお姉さんになったから、消えちゃったんだ」とでも考えて納得してほしてほしい。

「どこまでクズなんだ」
こんなだから友達もできないし、親にも家から追い出されるんだ。

考えたって仕方ない。頭を振って前を向いた。この砂利道のすぐ近くに伊予の家がある、さつさと通り過ぎよう……

「ラム！」
約二カ月、ほぼ毎日聞いた女の子の声。その声は、鼓膜が裂けそうなほど鋭かった。

気づいた時には、俺は息を切らして伊予の家に続く細道を走っていた。走ったのは十年ぶりだ。

縁側の前には、黒いトラックが止まっていた。伊予の両親の車だろうか。女の子の泣き声。俺はトラックとブロック塀の隙間をすり抜けて、見慣れた縁側の前に出た。塀に擦れたのか、Tシャツから出た二の腕から血が出ていた。

縁側に座り込んだ女の子。その赤みが勝った髪を、フードを被った背の高い男が引つ張っていた。

「……伊予！」
俺の存在に気づいた男は、鼻のように首を回して俺を睨みつけた。三十歳くらい。金髪。プリントされた柄が擦り切れたパーカー。……こいつだ。

「ラム！この人パパじゃない、知らない人！」
男は伊予を抱えてトラックに走り出した。

「放せコラ！テメエ！」
伊予の泣き声を掻き消すくらいの声で叫んだ。あまりの動揺に声が裏返っている。人に“テメエ”なんて呼びかけたのは初めてだ。

男の腕を掴んで伊予から引き剥がそうとしたが、俺の貧弱な腕力ではどうにもならない。誘拐されそうな時って、どうするんだっけ。思い出せ、小学校の防犯教室で教わったはずだ。

俺は男の腕に噛みついた。固い。腕が太すぎて、文字通り歯が立たない。もう片方の腕で突き飛ばされた。俺は砂利に這いつくばる。マズい、男が運転席のドアを

開けた。連れ去られたら終わりだ。車の速度で移動されたら、どうにもできない。

考えろ。考えろ……逆に、ここから移動させなければまだ勝ち目はある。

俺は手元の砂利の中から、一番尖っている石を掴んで、車のタイヤに突き刺した。何度も繰り返して刺すうちに、手の爪が割れた。

ブツッ。ラムネのビー玉を落とした時みたいな音が出て、タイヤの空気が抜けていく。

男が俺に向かってきた。俺はスマホを地面に捨てて、両手を挙げた。……引っかかれ。

男がスマホに目をやった瞬間、俺は男に体当たりした。俺に筋力は無いが、体重は標準くらいにはあるはずだ。男がバランスを崩した隙に、伊予を男の腕から引き剥がす。

「伊予、家ん中入って警察」

腹を蹴り上げられて言葉が途絶えた。視界が横転して、口に鉄の味が広がる。体を蹴られているのか、殴られているのか分からないが、体に痛みの波が打ち寄せる。景色が擦りガラス越しみたいに見える目で、伊予の姿を探す。赤っぽい黒が縁側の奥に消えていった。その直後、月が停電したように視界が真っ暗になった。

「……また明日、絶対だよ」

「あんた、何やってんのよ」

「……ごめん」

真っ白な病室。色が着いているのは、朝の空色を映す窓と、母親と、母親が剥いている林檎だけだ。

『「ごめん」じゃないでしょうに』

「……うん」

「何十年ぶりだと思ってんの。お父さんが泣く姿見たのなんて」

「え、来てたの？」

「この三日間ずっとね。さつき、アンタが起きる前に渋々仕事行つたわ。メールしておきなさい」

「うん……」

ズキズキする体を起こして、ベッドの横のテーブルに置かれたスマホに目をやる。手に取ろうとしたら、包帯に覆われたミイラみたいな指先が痛んだ。

「馬鹿、爪剥がれてんでしょ。看護師さんが言つた」

「マジ？剥がれてんの？」

母親は返事をする代わりにため息を吐いた。

「縁もゆかりもない所の病院から連絡が来て、何事かと思つたらこれだもの……。ほんと、馬鹿な息子をもつたもんだわ」

「うん……。馬鹿で、クズな息子でごめん」

母親の、林檎を剥く手が止まった。またため息を吐かれる。

「……クズとまでは言わない。この結果を褒めるわけにはいかないけど、アンタが自分より弱いものを守ろうとしたことは、まあ……事実だからね」

伊予のことを知ってるのか。

「そうだ、伊予！伊予……その女の子は？大丈夫だったのか？」

「うるっさいね大丈夫だよ！その様子なら怪我も大したことないね。……その子はどこも怪我しなかった。お祖母さんが通報してくれて、男も捕まった。お祖母さん、耳が悪いんですって。女の子が寝室に逃げてくるまで、事態に気づかなかったみたい」

「そっか……」

伊予は無事だ。壁掛け時計を見る。午前七時。今頃伊予は学校に行く準備でもしているだろう。

俺が伊予にしたことは許されない。結局伊予は、俺が実在する人間だということも知ってしまった。俺の嘘に気づいてしまった。気づかせてしまった。

でも、伊予は俺のことを最後まで“ラム”と呼んでくれた。

伊予にとつてのラムが、最後に伊予を見捨てなかった。最後に伊予を日常に帰した。それが唯一の救いかもしれない。……結局この救いも、俺にとつてのものでし

かないか。

「アンタ、ちよつと変わったね」

母親は突拍子もなく、そんなことを口にした。その声色が妙に優しく、なぜか気色悪いと思った。子どもの頃の俺がよく聞いていた声、かもしれない。

「なんも変わってない。クズのままで」

病室のドアの向こうから、廊下を走る足音が聞こえてきた。

「あ、来てくれたみたいよ」

母親はドアの方を見て微笑んだ。

「誰？看護師さん？」

ドアが勢いよく横にスライドした。俺の目線の先には、誰もいない。少し目線を下げた。……赤っぽい黒。

「おはようございます！」

病室に入ってきたのは、ランドセルを背負った伊予だった。

「おはよう。ごめんね、毎朝学校行く前に寄るの、大変じゃない？」

「大丈夫！」

伊予はベッドに飛び乗って、俺の顔を見つめる。走ってきたのか、外の気温は高くなさそうなのに汗だくだ。

「起きたね。伊予のこと覚えてる？」

「……もちろん。でも、なんで来てくれたの？」

『なんで』って、お見舞いだよ、お見舞い」

「そうじゃなくて。俺、ずっと嘘吐いてたんだよ。その……怒らないの？もう会いたくないとか思わないの？」

伊予は真剣な顔で何か考える。夏休み中、俺が言ったことが理解できない時にも、よくこういう顔をしていた。

「今までずっと嘘吐いてて、ごめん。初めて会った時、お金持ってなくて助けてほしかったから、あんな嘘吐いて伊予を騙してた」

「うん……」
「すぐに本当のこと言えばよかったのに、嘘がバレて警察に通報されたり、伊予に嫌われたりするのが怖くて言えなかった」

「伊予は俺のこと……ラムのこと、ずっと信じてくれてたのに、その気持ちを裏切った。ごめんなさい」

伊予は考え込んだまま、俺の言葉を反芻するように聞いていた。そして、口を開く。

「うーん……。あのね、伊予も嘘言ってた。ごめんなさい」

「え？」

伊予はバツが悪そうに笑う。

「ほんとはね、伊予のママとパパ、夜になっても帰ってこない」

「ああ、そうだったの……」

二人とも単身赴任なのか、何か事情があつて別居しているのか、あるいは……。

「このこと友達に言ったら、皆遊んでくれなくなっちゃった。だからおばあちゃんとね、パパとママが帰ってくるまでは誰にも言わないで内緒にするって約束してたんだ。伊予が良い子にしてたら帰ってくるから。だから、夜になったら帰ってくるって嘘言った」

「そっか。いいんだ、気にしてないよ」

俺の声は震えていた。伊予が嘘を吐いていたことがショックだったんじゃない。

誘拐犯に会ったあの時、どうしてあんな夜に伊予が縁側に出ていたのか疑問に思った。伊予は、ご両親が帰ってくるのを待ってたんだ。

俺は自分のことしか頭に無くて、伊予のことを全然考えていなかった。

今思い返せば、不自然なところはたくさんあった。伊予を初めて見かけた時、伊予は同級生らしき子ども達と話すでもなく、子ども達の後ろをただ歩いてた。夏休み中もずっとあの家において、俺以外と話す姿は見なかった。俺がいない間、伊予はずっと、話し相手のいない静かなあの家で、ご両親の帰りを待っていた。初めのうちは、菓子を食べている十分間ほどしかいなかった俺を、伊予は引き止めたがった。その結果、俺が縁側に居座る時間はじわじわと延びていった。夏休みの終わる頃

には、俺はあの縁側に毎回二、三時間居座っていた。炭酸が抜けきって、砂糖水みたいになったラムネの味をよく覚えてる。

傍にいたところで碌に会話できないような俺だったが、そんな奴でもないよりはマシだったのだろう。

それがどうだ。伊予の行動を微塵も気になけなかった俺は、自分の都合で、伊予に何も言わずに伊予の家に行くのをやめたり、気まぐれにまた来たりしていた。

『最近いなかったから、消えちゃったのかなって心配だったんだよ』

『今日、遅いね。来ないのかと思っちゃった』

伊予の言葉の真意を、今になって理解した。

「伊予、ごめん。ごめん。なんにも気づかなくて」

どっちが気楽な子どもだ。また視界が霞んで、伊予の顔がよく見えなくなる。

俺の頭に、小さな手が乗った。

「いいよ。私も嘘言っでごめんね。……それとね、ありがとう。助けてくれて。約束守ってくれて」

「え」

「昨日、『また明日、絶対だよ』って言ったら今日起きてくれたでしょ。だから伊予、怒ってないよ」

俺は声を出せなくて、代わりにぼやけた赤っぽい髪を撫でた。指先から何かがにじみ出たけど、構うもんか。大きい目が俺の顔を見上げているのを感じて、無理にで

も笑ってみせた。

「どっちもお互い様だね。もっかい、初めから友達になろう」

「うん。よろしく、伊予」

伊予は俺の首に飛びついて言った。

「よろしく、優！」

伊予のイマジナリーフレンドだったラムは、夏と一緒に消えていなくなった。

「ありがとうございましたあ」

おでんのカップを抱えたお客さんが、会釈をして帰っていく。

「優君、おつかれー。今日はもう上がんな」

店長が煙草の在庫を確認しながらそう言った。

「ありがとうございます」

俺はスタッフルームで服を着替えてから、店内に戻った。

「すいません、ちよつと買いたいのものが」

「ああ、はいはい。珍しいねえ、君、一回もここで買い物したことなかったろ？」

俺は「すいません」と頭を下げて、レジ前の菓子コーナーからオレンジの洋菓子は何個か持ってきた。

「おお？こんな小洒落たもんを優君が食べるとは思えんなあ。恋人にかい？」

「友達です」

「なんだあつまんねーの。君、恋人はいないのかい？クリスマスはどうするんだい？」

「あ、平面ですね」

「ヘイメン？」

「画面見ながらチキン食べます」

「ガメン……？」

俺はレジ袋を提げて細道を歩く。冷えた砂利が足元でぶつかり合う音が響いた。もう十一月になる、いい加減ロングTシャツで誤魔化すのをやめて冬服を買おう。見慣れた家が見えてきた。……見慣れたはずなのに、まだ玄関から入るのは新鮮に感じる。

「こんにちは……」

「いらっしやい。ええと、優君だね」

「はい」

おばあさんはレトロなレジの前に腰を曲げて立っていた。背が低くて、一瞬どこにいるか分からなかった。

「伊予はいつもとこだよ」

「ありがとうございます。お邪魔します」

俺はおばあさんにコンビニで買った洋菓子を一つ渡したが、おばあさんは怪訝そうに首を傾げた。お菓子屋さんにお菓子って、ダメだったかな。

「なんだいこれ。食べられるんかい？」

「あ、はい。食用です」

「へえー、こりゃいいね。いただくよ」

俺は飴色の廊下を通って、奥の障子を開けた。

畳の部屋。オレンジ色の日光が射し込む窓辺の縁側に、

伊予が座っていた。

「伊予」

「……優！」

伊予の笑顔が、何よりも暖かい光を放っていた。